



認定NPO法人若葉台(横浜市)

地域資源を活用した住みよい団地

■大規模団地を支える活動

横浜市旭区にある若葉台団地(※)で、積極的にコミュニティづくりに取り組んでいる認定NPO法人若葉台。「支援が必要な住民が安心して心豊かに生活できるまちづくり」、「住民の心と生活が充実できるコミュニティづくり」、「行政との協働事業」を活動目標に掲げ、支援が必要な高齢者、障がい者、子育て中の親と子の居場所づくりを進めています。

同法人の理事長である白岩 正

明さんは、団地分譲住宅の第一期入居者であり、同時期に入居した方々とともに若葉台団地を盛り上げてきました。

白岩さんは言います。「入居開始後は、段階的開発の初期ということで生活上不便なことも多々ありましたが、住民同士が協力しあって行政に要望したり、改善したりしてきました。私もそのうちの一人。この団地を良くしてきたという自負が、団地への愛着につながっています」。

こうした白岩さんの想いが活動の根源になっています。

■立上げのきっかけは、障がい者の通所施設の設定

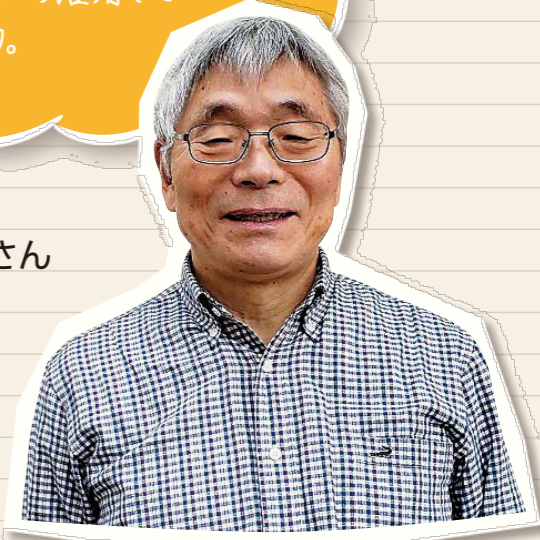
法人を立ち上げるきっかけは、障がい者の通所施設「若葉台ぶんげいざ」(2012年開設)であるといいます。それまで若葉台では障がい者支援の取組みは進んでいませんでした。しかし、誰もが安心して暮らせるまちを実現するためには障がい者も通える場が必要であり、その場を運営



出典：昭和大学

一言アドバイス

地域資源にしっかり目を向けて、
試行錯誤しながら活用して
いくことが大切。



認定NPO法人若葉台
理事長 白岩 正明さん

成功のコツ

- ・地域資源に目を向け、廃校や空き店舗を活用
- ・地域関係団体との連携、企業や大学など外部の力を活用

づくり

するには法人格をもった組織が必要だということが、NPO法人の立上げの決め手になりました。

現在では活動の幅も広がり、「若葉台ぶんげいざ」以外に多世代交流拠点「ひまわり」や親と子が集う広場「そらまめ」の活動も行っています。

■地域資源、外部の力の活用

地域にある多くの資源にしっかりと目を向けることが大切ということから、「若葉台ぶんげいざ」は廃校を、「ひまわり」や「そら

まめ」は空き店舗を活用しています。

「廃校や空き店舗の活用は、横浜市や若葉台まちづくりセンター、管理組合など様々な団体との調整が必要なので容易ではありませんが、この団地をより良くするために粘り強く交渉してきました」と話す白岩さん。

さらに、昭和大学と協働しての健康増進活動「若葉台健康フェスタ」を開催するなど、外部の力を活用した取組みも進めています。

地域が抱える課題に積極的に取り組み、廃校や空き店舗など

地域資源を上手に利用しながら活動を展開し、企業や大学との連携など、良いものはどんどん取り入れていく、そうした白岩さんの前向きな姿勢が、若葉台団地の活性化につながっています。

※若葉台団地
横浜市旭区に所在し、東京ドーム約19個分の広い自然の中に、高層住宅を中心に病院・銀行・教育施設・ショッピングセンターなど、都市の利便施設が計画的に整備されたまち。また、居住者の約半数が65歳以上という高い高齢率にもかかわらず、要介護認定率が全国平均を大きく下回るという特徴を持つ。2019年3月末の人口は約1万4千人。



あづま
県営吾妻団地「ふれ愛・サロン吾妻」(厚木市)

サロンで孤老を防止 運営のカギは文章化

■地域全体の居場所として

会長の葛巻 公司さんは県営吾妻団地に移り住んで8年になります。自治会活動に参加する中で、役員の任期がなくなずっと関わり続けられる組織で「高齢化の課題と向き合いたい」、そんな想いで2019年6月、団地の空き部屋をサロンに改装し、「ふれ愛・サロン吾妻」を立ち上げました。団地の内外問わず、誰でも気軽に集える憩いの場所になっています。

月に2回、第一木曜日と第四日曜日に開放し、茶話会やゲーム、手芸、軽い運動などを実施して、お年寄りの引きこもり防止、寝たきりや認知症の予防につなげています。

■生活のよりどころ

サロンを利用する方は、まず登録して会員証を作ります。会員証には氏名のほか緊急連絡先、血液型、持病の有無、それにサロンの会長・副会長の連絡先まで記載されており、これを持っ

ていればサロンの外で何かあったとしても安心です。利用者のニーズを把握するため、サロンにはアンケートボックスを設置。集まった声を運営に活かしています。

利用登録者は2020年2月現在で87名。9ヶ国・10名以上の外国籍の方も登録しており、行政関係の手続きなど、日本の暮らしでわからないことを外国語のわかるスタッフに相談できる場となっています。



■ポイントは文章化

サロンは団地の各部屋に配布される自治会報での募集で集まった18人のボランティアで運営しており、月1回の定例会で問題点の解決を図っています。工夫したポイントは文章化して情報を共有すること。当番の人はその日の活動が終わった後、日報を提出することになっています。そうすることで課題やノウハウがスタッフの間で蓄積、共有され、開設から1年足らずで、理事長がいなくてもサロン運営が回る仕組みが整っています。

一言アドバイス
仕組みづくりと情熱が大切です。

県営吾妻団地
「ふれ愛・サロン吾妻」
会長 葛巻 公司さん



成功のコツ

- ・理念を文章化し、メンバー間で共有する
- ・アンケートボックスを設置し、常にニーズを把握する
- ・団地の外にもノウハウを惜しまず共有

また、何のためにどのような活動をするのかという理念や年間の活動計画についても葛巻さんが文章化し、メンバーが共有したことで、各スタッフが自発的に動ける体制ができたそうです。

■広がる活動

サロンの開放のほかにも、支援が必要な生活困窮者に食料を配布する仕組みである「フードバンク」や、高齢で外出するのが難しい方のために、サロン内で理髪サービスを提供する取り組みをNPO法人と連携し、計画しています。他の団地など同じ悩みを持っている方達にもこうし

た取り組みを広めたいと考え、ほかの団地で講演したり、PR動画を作成したりしています。

■世界に広げていきたい

短期間でここまでものを作りあげることができるとは、葛巻さん自身もびっくりしているとのこと。「何か特別なスキルが必要というわけではなく、お年寄りを守ってあげたいという気持ちが大切」と話します。ゆくゆくはサロンの活動をNPO法人化したいそうです。日本にとどまらずこのような活動を世界にまで広げたい、それが葛巻さんの願いです。



県営日野団地自治会（横浜市）

空き部屋と移動販売で作る支え合いの場



■住民同士のつながりをつくりたい

県営日野団地は、26棟、700以上もの世帯からなる大規模な団地ですが、最近では付近の別の集合住宅で自治会が解散してしまうなど、住民同士のつながりが希薄になりつつあります。そんな中、団地の住民が好きな

時にフラッと立ち寄れる場をつくりたい、そんな想いで自治会長の田中 健三さんを中心に立ち上げたのが「憩いの家」です。

■苦勞した運営ボランティア集め

団地の空き部屋だった場所に福祉団体の助成金を活用してテレビや冷蔵庫など必要なものを調達し、交流スペースに変身させました。個人での利用のほか、刺し子や木彫り、絵手紙、習字など、趣味のグループ活動にも利用されています。今では週5

回のペースで開放しており、利用者は約200人にも上りますが、開設当初は「憩いの家」を管理するボランティアを集めることに苦勞しました。そこで、少額ではありますが有償としたことでボランティアの方が手を挙げてくれました。

■スーパーの移動販売の実現

団地の周囲には坂が多く、お店に買い物に行くのが難しい方もいます。その課題を解決するため、近所のスーパーに働きか

けて、団地での移動販売を実現しました。当初スーパーは実施にとっても慎重でしたが、区役所、社会福祉協議会、地域ケアプラザとともに交渉を重ね、実施にこぎつけました。

住民にとって便利でも、スーパーの採算が取れなければ続きません。そこで自治会の役員が中心となって、自治会の集会の場や団地内の放送で周知したり、移動販売のパンフレットを作成して全戸に配布するなど、多くの人に活用してもらえるよう努めています。このような団地側の努力もあって売り上げは

好調。移動販売専門のスタッフが採用されるまでになり、販売車も一台から二台体制に拡大される予定です。

また、定期的にやってくる移動販売は、団地の住民同士が外に出てコミュニケーションをとるきっかけとなっており、しばらく顔を見ない時には声をかけ



るなど、安否確認の機会にもなっています。

■失敗を恐れずやわらかい頭で

「失敗を恐れずやわらかい頭で。失敗しても別の誰かが良い方向に変えてくれる。」という精神で、様々な取組みを実施して団地を支えてきた田中会長。モットーは「もっとまわりに迷惑をかける」。気兼ねなく周囲を頼れる関係づくりに努めた結果、団地内の孤独死も減少したそうです。「憩いの家」は今年で5周年。「このような取組みを、いずれは全国に広げたい」と話します。

一言アドバイス
失敗を恐れずまずはやってみる。

県営日野団地自治会
会長 田中 健三さん

成功のコツ

- ・ボランティアは少額でも有償とすること
- ・失敗を恐れずやわらかい頭でまずは実践してみる
- ・地域の課題をしっかりと把握することが、住民の笑顔につながる



県営今宿第二団地自治会（横浜市）

団地でのオープンなサロンから広がる

■ふらっと気軽に立ち寄れる場所

県営今宿団地にも高齢化の波が押し寄せ、交流拠点であった集会所が遠くて足を運べない人もいます。そんな中、ふらっと立ち寄れる交流スペースとして、団地の空き部屋を改装して開設されたのが「まごころの家」です。「孫」「子」「老人」で「まご・こ・ろ」というのは自治会長菊地 弘さんのアイデアだそうです。横浜市旭区の助成金

「きらっとあさび」を活用して、部屋の中の壁を取り払ってスペースを広げ、必要な家電などを揃えました。

■周りの人を巻き込む工夫を

足りない部分は、元大工の方に靴箱や机、物置を作ってもらうなどして、みんなで補い合っています。利用者が自由に読める本は、保土ヶ谷図書館の「団体貸出」の制度を利用するほか、県立図書館から不要図書の提供を受けて調達したもの。また、

切った木の葉を動物の餌として提供することで、団地の木を動物園に無料で剪定してもらうなど、周りの人を巻き込む工夫をしています。

■利用者へのきめ細やかな配慮

会長の菊地さんは、団地自治会の立ち上げから関わっている生き字引。もっともっとこの場所を活用してもらうため、来客時に「みんなの応接室」として活用してもらうことも考えているそうです。菊地さんを支える



地域の輪

のはスペースを管理するボランティアの皆さん。横浜市の消費生活推進員や民生委員を経験されている方々で、一人ひとり電話をかけて来室を促すなど、きめ細やかな配慮が光ります。スペースには調理器具も整っており、利用者の皆さんのリクエストを受けて料理を振る舞うこともあるそうです。

■広がる利用の幅

皆さんで健康マージャンや小物づくりを楽しむ毎週水曜日の

一言アドバイス

団地の外のニーズにも耳を傾けて。

県営今宿第二団地自治会
会長 菊地 弘さん

成功のコツ

- ・団地内で閉ざさずオープンに活動すること
- ・利用者へのきめ細やかな配慮（個別に電話をかけて来所を促すなど）
- ・居心地のいい空間づくり

レギュラー開放のほかにも、団地内の要介護度の高い方の外出の機会として塗り絵やパズルを行う会に利用されたり、最近では団地外の方のお茶飲み会にも利用されたりと、団地の内外問わず皆さんの要望に応える形で利用の幅が広がっています。

■団地内で閉ざさずオープンに

いろいろな人から助けをもらいたいので、団地内で閉ざさずオープンな取組みとしているとのこと。団地が近所の保育園のお散歩コースになっていることから、園児たちが「まごころの家」を訪れて交流することもあ

るそうです。また、地域ケアプラザとのつながりも深まり、毎月1回出張相談に来てもらっているそうです。ここでのちょっとした会話が、ケアプラザ単独では把握できない課題の掘り出しに役立っています。





関東学院大学生による空き家再生・活用事業（横須賀市）

横須賀の谷戸地域に響く若者の声

■自治会×市×大学による空き家再生・活用

リアス式海岸のように谷が入り組んでいる谷戸（やと）地域では、近年、郊外住宅地などの他地域と比べ、空き家や空き地が増加しているため、コミュニティの希薄化が進んでいます。こうした課題に向き合ってコミュニティの再生・活性化を図ろうと、自治会、横須賀市及び関東学院大学が協働で、空き家再生・活用事業に取り組んで

います。

きっかけは、2014年のこと。同大学で、地方の空き家活性化を学んでいた学生が「実際に取り組んでみたい」と教授に相談したことでした。大学のすぐ近くに谷戸地域があることから、空き家の再生・活用が始まりました。それから空き家の改修を積み重ね、地域のイベント参加など、地域に入り活動してきた中で、近所付き合いのように新しい関係をつくることから始め

ようと、2019年7月にオープンしたのが「守谷ノ間」。追浜駅から徒歩8分ほどに位置する築80年の木造2階建ての空き家を、地元工務店の協力を得ながら改修。「住人」となった3名を含む法学部の学生たちが、様々な企画・運営を行っているのです。

■大切なのは日々のつながりの積み重ね

「大切なのは練りに練られた企画ではなく、学生が地域の人



一言アドバイス

人のつながりは地域に入ることで生まれる。



関東学院大学の学生のみなさん

成功のコツ

- ・何をするか、実際に地域に入って住民の方と接する中で考える
- ・学生のアイデアをまず実施してみる。うまくいかなければやめればよいという。試行錯誤の繰り返し

たちと接する中で日常に密着した交流を企画し実行することで」。これは、学生を指導する同大学法学部地域創生学科准教授 木村 乃さんの、25年以上フィールドワークに携わってきた経験からの言葉です。「自分たちがやりたいだけの大きな企画を単発で実施しても、その後に人のつながりは生まれません。実際に地域に入りながら、自分たちで何をするかを考えて欲しい。成功体験だけでなく、失敗体験も重要。その一つ一つが新しい学びになり、地域の人たちとのつながりになるので

す」とのこと。

■おらかな町内会長の存在

そして、そんな学生たちの取り組みを可能にしているのが、鷹取町内会の座間味 隆会長の存在です。学生が知らないうちに庭木が剪定されていたり、家具が増えていたりする。座間味会長や町内会の方々が「守谷の間」を自発的に「育てて」いるのです。座間味会長は「学生にも遠慮することなく一歩踏み出してもらって、ダメなら引いてもらえばそれでいいんです」とおおらかに見守っています。

地域の方に学生が教わる「麻

雀の会」は大盛況でした。学生は当初、将棋大会を企画していましたが、将棋を指す住民がほとんどおらず「麻雀」が大人気だということがわかり、「麻雀の会」を開催することになりました。「学生と接することで皆の気持ちが若返っています。また、若者が住んでくれていることでにぎやかになり、安全・安心の効果もあります」と座間味会長。

大学生が実際に住み込むことで、自治会、市、大学が日常的に顔を合わせながらつながっていくという、「守谷ノ間」はそんな地域交流拠点です。



真鶴テックラボ (真鶴町)

最新テクノロジーを地域に提供して新しい人の

■地域の賑わいを取り戻したい

真鶴町に出現したクリエイティブスペース、「真鶴テックラボ」。3Dプリンタなどのデジタル制作機器やワーキングスペース等を完備した施設です。この「真鶴テックラボ」を中心に、最先端テクノロジーに携わる企業や個人事業主だけでなく、地元住民や漁業関係者も参加した新たな「創作コミュニティ」が誕生しています。

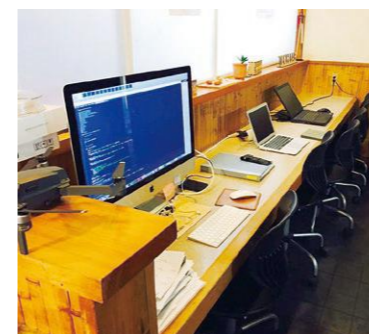
運営者の柴山 高幸さんは、

10年ほど前に真鶴町にUターンしました。すると、母校の小学校は既になく、思い出のある商店街も当時の面影はなくなっていました。「自分が住んでいたころの賑わいを取り戻したい。観光協会や行政などには同級生もいる。仲間がいれば何かできるかもしれない」という柴山さんの想いから、真鶴テックラボは生まれました。

■地域の特性を活かした展開

真鶴町は、都心から程よく離

れた港町。見方を変えると、「都心から程ほどの時間でアクセスができ、集中できる環境でクリエイティブな発想が促される場所」だといえます。ここに着目した柴山さんは、システムエンジニアとして企画に携わってきた経験を活かし、2014年に全国の町村で初めて、スタートアップウィークエンド(※)を開催しました。その中で、「アイデアをすぐに形にできる場所が欲しい」と考え、地元の空き家



一言アドバイス

新しい取り組みを行いたいときこそ、地域の人々とながらること、地域特性を活かすことが大切です。



真鶴テックラボ

管理者 柴山 高幸さん

成功のコツ

- ・地域の様々な場所に同級生という仲間が存在
- ・都心から程よく離れた港町という地域の特性を活かした企画設計
- ・最先端テクノロジーを身近に感じてもらうなど地域の人たちとつながる工夫

流れを生む

を自分たちの手で改装し、設備を整え、真鶴テックラボをつくりました。

■テックラボから広がる人のつながり

そんな真鶴テックラボに人や企業が集まる理由を尋ねると、「ここが、地球と人がつながることができる場所だからです」とのこと。生活の中のちょっとした困りごとに新しいアイデアの種があるため、地域の方と親しく接することができる真鶴

テックラボは、創作にうってつけの場所だそうです。

「最先端機器を地域の方に親しんでもらえればと、地域のイベントで3Dプリンタやドローンを稼働したりしました。人だかりができて、いろんな話をしているうちに、気が付けば、気軽に立ち寄っていただける場所になりました」と話す柴山さん。地域の困りごとについて企業、地元の若手、移住者や高齢者等と一緒に話し合うことから始まり、今では、テックラボの企業の方々と地域の人が、地元の酒屋で飲むようになっているそう

です。

さらに、地域外からも、旅行中の外国人やジェンダーフリーの方々が訪れるなど、ダイバーシティなコミュニケーションの場にもなっています。

地域に根差した最先端技術の創作拠点「真鶴テックラボ」では、多様な人のつながりが広がり続けています。

※週末3日間かけて開催する起業体験イベント。

